新撰發句集 乾

類題發句集冬部

十月

蝶夢編

更衣　のぶすゆ麦蒔てから衣かえ　一井

小春　まさ竜ハ袖とかゝり太うえ　李下

時雨宋の方く一日小春ぶり　猪通

てのく北日の冠者ぶ小春ぶり　桃妖

昼中ゝ一時ぶり小ぶるる孔　理紀

雄めま鶏子出ぶ小六月　六石

夕陽の涼ぶ小六月　発夢

神送

夜ちらしや一云々のおもしろき句
なるこの歌花鹿毛や神送
此上ふかき句なるよ木の葉や神送ち
国よりも速く神を送る
めでたく雲の書ふりや神送
留主の男に荒き神の語ふ
神垣の留主たのもしや源大夫
此留主とて片も古く此ふ
弟大や孫も直さん神の留
淋敷も木の葉よ祈り神送ふ

英隆 一露
正秀
露川
国雄
隆之
芭蕉
涼菟
壺平
荷兮
東岩

神の留守

一

夷の子

もちもちと傾城を見れば
重箱を取り寄せ
おもしろ秋とは伏見
建礼門院の腰を一さくる
たらの花や柳ふさ
建礼門や鏡柳も
建礼門の柳の
芭蕉忌

尾張 徐寅
沐水
度元
曾良
乙由
琴海
伊勢 許虹
棠故
史邦
支考

御影講

十夜

芭蕉
泊園
許六
支邦
巴静
寿仙
浪化
許六
乙由
丶

蛭子講

誓文拂
御取越

神迎

芭蕉
丶
其角
巴雀
巴雀
巴雀

燒開

炉開や左右に蟹の泉　芭蕉
燒開り庭に成たる蛇の心　芳平
炉ひらきに遠出なれば　許六
石ぶきや漫々つゞく庚の石　孟遠
炉開やまくらもあるる電灰　江戸 夜錦
口切て燈明庵そろひ　芭蕉
口あやゝ今手ぬぐひ　木孝
口おりや袴の結た線菊　其角
口切や四月五日の雨　尾張 紀末
きふさらの今もふるひ時雨　芭蕉

初冬

初時雨

初しぐれ猿も小蓑をほしげなり　去来
考ふ羽もものいつくろ俗神なし　許六
新菜の屋根の家やもり菊　野坡
はつ霜の姫の跡目や初しぐれ　休斗
朝日や三粒降るも初時雨　西吟
神々し師走なま青のあるあり　酒堂
新庵の石も苔ぬく初時雨　風朱
遍路くゝ山遠ひらり走るし　乙由
その宋の茶屋賞んら霜　宗中
佛きの裏ぬんら初しぐれ

時雨

相の宮はしりく神ぬれ　　希内
夕雲ぬけてくもりてくもる　　柳几
雲くらも先へ去て行こし　　去来
一時雨ちらぬ山の姿　　芭蕉
ちく敷やゆ田の苗株の黒き迄　　如及
ふり来しに寺ぬれて夕時雨　　木山
千鳥ひとつ入日後て去れば　　露沾
一しぐれ鶴ぬれ行く日和　　支角
雲ふの日ぬ我人ぬる嵐　　文字
一方ぬ三数のふつふ雲ふれ

雨ぬりう仲の時雨雲ぬ　　杜国
馬ぬぬ牛ぬ名日のぬ　　鳶水
ぬりぬ牛ぬ名日のぬ　　嵐蘭
さ夜ぬ時く這入る傘の雫　　北枝
化の星ぬ時雨ぬ　　乙州
るこのうて井田の星ぬ　　李由
麦畑の去ぬ嵐ぬ時雨ぬ　　什筋
苗ぬ嵐の嵐く雨ぬ花　　子邦
時雨きや嵐ぬ嵐ぬ　　正秀
徳持の松ぬ

朔日ふりてあさく来れば時雨かな　泥足

芋堀りし男ゑやみ戻る時雨　風国

鐘すさぶ川横くらき時雨かな　布囿

桂の葉ふる音は切さし時雨かな　摂津 之瓜

庵ふりて諌の時雨聞く夜かな　巴静

川音時雨

川音や志ぐれぬ月夜や嵐のゝ　信濃 北逢

松風時雨

時雨ねば淋しき松風のたつ音かな　小枝

志ま記

志ぐれ来る空の果や雲の方　丈草

笠もて笠ぬぎ直す志ぐれかな　闇指

初霜

さ川霜や芦折ちらす浜伝ひ　支考

霜

白霜の上に夜ひの乾や雪の空　千川

初霜や麦まく土のくろみより　北枝

初霜や衾の中より寺の門へ　野坡

葛の葉の表見せけり今朝の霜　芭蕉

馬屋見る風のこす寒けし今朝の霜　夕兆

一葉やひと夜ふりし朝がけの霜　支考

加賀風や吹荒れ寒き霜ふらし　越中 意足

霜しるや橋杭の影もうつる　一村

何取りて坂道遠し橋の霜　盧元

野霜や橋あかり道のうちの月　可兆

霜枯

雲夜

初雪

[illegible]や城あるじ[illegible]芽ぐみ　近江　荷津

さく[illegible]あれ[illegible]あ[illegible]霜枯　野老

霜ふる夜[illegible]や古[illegible]　園仙

[illegible]ばかり[illegible]やくや[illegible]枯　土芳　林句

一色もう[illegible]あるる夜霜夜　耽水

[illegible]豆や[illegible]雲よりきく霜枯　句空

雲の夜や大のうれなく樫の下　作蓼　猛牧

[illegible]雲[illegible]ふ藤の[illegible]　木因

初雪や[illegible]の[illegible]たと[illegible]　芭蕉

はつ[illegible]や無[illegible]ふる枯の上　〃

初雪[illegible]よりの[illegible]へ[illegible]孫[illegible]れ　玉角

[illegible]ふる[illegible]小夜[illegible]何[illegible]　〃

はつ雪や枯木のとよる[illegible]　曲翠

初雪の後の[illegible]　知及

初雪や人の機嫌[illegible]　耽隣

[illegible]雪や[illegible]　山川　尾尾

初[illegible]や[illegible]　卍春

初雪や[illegible]　耽故

[illegible]雪や[illegible]　路通

はつ[illegible]や[illegible]　文考

しら雪や横川の杉の三ヶ一　千那
初雪を虎きゝと如ちかり麦の畝　孤屋
はつ雪やむかしのひさし相宗は　鈍水
しら炭や見る歯の深雪哉　許六
初雪や何ともなく吼る犬　彦根 蘭玉
初雪に飛石ほしのことさら　斜嶺
はつ雪の降りやまゝなる窓晴に　利牛
しら杉や幾曙の寝覚にも　藤弓
初雪の紀やよき素去のせ大根　治之
しら雪やかくえて人も執行の墨　筑前女 まん

初氷

しら雪や竹田の人をも通る民　兎士
しら波や田中の杭の上につく　杉居
初雪や波の立こぬ岩の上　淡々
はつ雪や見る処に有合と　加賀 花仙
しら雪や下京まで八坂かな　梓琉
閼伽棚の草紙に残る初氷　宗端
残る沢の見えぬしや江川氷　巳辞
曉り出す手あらさへ初氷　鳥明
流をもとめるは十夜の堀の月　牧風
捨人をも鏡の氷　蒙き

続坊

冬の月

[illegible]木戸や絶のさしはく冬の月　暮角
相の木葉赤きこそ冬なれ　素堂
[illegible]月こそさめし枕の色　壮蒙
[illegible]月や花合数ふ夜間ひ　若の子
[illegible]の月みさし通ふ冬籠　秋風
[illegible]月の光り　古芳
[illegible]冬の月　毋解
[illegible]の雲こそ[illegible]　光夏
[illegible]夜[illegible]冬[illegible]　信徳　鶴光
[illegible]の[illegible]　鉄夏

寒

俗[illegible]枕[illegible]
[illegible]の歯[illegible]
松葉と焚[illegible]
[illegible]
[illegible]明[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
大[illegible]刀の[illegible]
業大根の[illegible]

宗鬼　芭蕉
〃　湖春
〃　太未
〃　利牛
〃　文秀
〃　許六
〃　乙物

人来る夜ふけ戸を敲くあり
[illegible]て杖もつかずして
仕方一人出て通す所
[illegible]あらふきの音
越後の産
鶴川屋一飯
つまして
高[illegible]
猫殺食す
[illegible]

[illegible]
舎殺
[illegible]
木[illegible]寺
[illegible]國
[illegible]
[illegible]
指志
山石
[illegible]良

落葉

芋麦和孔抗の[illegible]
[illegible]
加[illegible]の戸[illegible]吹
[illegible]
裏座の[illegible]
猫屋敷の[illegible]
百[illegible]
掃[illegible]
刀[illegible]
狼屋[illegible]

角上
[illegible]
千仙
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

木葉

玄梅
牧童
丶
尤静
巴静
木兒
後川
馬次
丹後
文百
寄民

枯葉
木枯風

芭蕉
松風
拙風
丈子
江戸
夢子
蝶夢
羽雨
言水
深蕉
芭蕉

去のゝしや刈田の沢水 秋葉水 惟然
木かゝり二日の月の吹ちぎれ 若芳
風や沖ゝ山ゝさむき山ゝ明 之角
こがらしや毛ふかき人を敲もし 智月
木のしたや村へ這へる青もみち 子珊
木枯やつくなく鳥の鶏の声 秋瓜
去のゝてゝ柿の柿赤ゝ紅葉 岩童
あしゝ木枯よゝもちの葉ずれ 子英
木枯や二の宮寒き幾つまで 昌房
去のゝしや鹿狩出人多明 文考

冬木立

去のゝしや乞井ゝゝ屋の軒 林和
木のゝしや業平ちがひの角 蓑世
風や或夜ひそうに雪ぶり 乗伍
去のゝしや先ゝ月の萩の高 真汀
木枯や日も照り雪も吹ちぎ 摂良
こがらしや京の寒き夜と男風 蝶夏
木のゝしや孔雀の毛さきの乱れ 但馬 蝶雨
風やさしけれども孔雀の鳴 尾張 蝶雨
去のゝしや沈りおゝ雪と星ちる 伊賀 東己
冬木立ゝ山ゝ山ゝたゝ西の 真角

うつくしき三井の仁王や冬木立　其角
鳥共羽ひろげしてたり冬木立　配刀
冬されの木ぶり見らん黄昏ぞ　去来
花の木も柿の木も斯く冬木ぶり　士朗
猿柿や霰されけり冬木立　鷺喬
駒繫の青葉もさらそ嵐ともし　兎士
冬されやむかしし欅の皮　松琵
冬ざれや鹿はちらちら冬木立　葭雨
浦風や一もとすまで冬木立　越後 木卯
行こえり三子坊や冬ざくら　彫司

冬木採
枯葎
枯蓮
枯芦

急しさ〳〵に採衣冬木立　游刀
何か出るいさ枝折し冬籠　涼嵐
冬枯の葎あさみに柳らし　梅周
古塚まぜて採る淋しうし寒　凉袋
聞つかなへる白や枯尾花　魚日
枯尾花犬も孤りつ似ぬくり　文京
今はまだ滝もあらん枯尾花　可兮
枯芦や鷺も橋を拝む捨小舟　京 蘭水
枯あしや何か折まする汐干潟　江戸 馬佛
うれしの衣田かしく枯芦　関更

枯萩

枯荻

枯女郎花

枯蓮

枯菊

枯葛

枯芋

枯野

枯芋

枯野

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

尚白
〃
東山
重行
吾仲
約童
蓮之
宗瑞
十磨
麦水

枇杷の花

月さしいづる方の枯野哉
冬の夜時雨ふるうし禁心
つれ咲きつれ散やらんひとの花
ひとの家訪るる夜の氣の毒
重陽の日に為義が一ッ枇杷の花
冬の日我家よりはひとの花
山茶花やいとゞ橋ゆかぬ後
山茶花やつれそよぐ風の音
山茶花や秋の残り成て咲
仏の衣と同まくれなゐの花

雨什
汀雨
尚白
涼莞
性徳
曲翠
泉袋
宋麦
俳太
東山

茶山花

帰花

[illegible]

明水　怒風　露川　曲翠　乙由　鳥洗　松巷　子代　建枝　殺梅

冬十又

八つ手花

[illegible]

尚志　百里　昨葉　千代　賈古　芭蕉　嵩川　一晶　鉢叢　鳥久

冬牡丹

[illegible]

水仙

[illegible]

[illegible]

綿木　風草
子代

菓の花　朱拙
周防　貞之

寒菊　正秀

仙台　仙右衛門
出羽　昊天
丸銑
芭蕉

[illegible]

つもり花　射和
許六
宰陀
長英
蝶夏
柳几
如月
麻元
素人
武州
重葉

室咲梅

大根引

納豆とゝ菜くゞ嫁や梅のはな　所役 心理

営々と棟と連て家と宅の中　現象

鞍坪に小坊主乗るや大根引　芭蕉

出女に投て通るや大根引　許六

手習の戻り道へ一把大根ひき　知足

水臭の露にぬれてや大根引　忘麿 倫参

下ろうもそろへて揃ふ大根引　兎士

念仏に力の入るや大根哉　宗川

引抜て遊ぶ事も大根引　秋瓜

手のむら洗ふ根を新し蕪引　千代

蕪引

干菜つる

木からしの庵寒々や干菜　浅芷

茎漬

一夜々々さむさ姿やつけ菜　梓九

君見よや我に入るも茎の桶　嵐雪

蕎麦刈

刈跡や畠の隅の蕎麦の茎　芭蕉

蕎麦ならや花あさく伊勢の畠　素龍

麦蒔

麦蒔て狐の穴を犬のけり　岱水

麦蒔や一時もなく吹く風　乙由

麦まきや旅に宿もらう　任暁 涼菟

静かさは数珠も定めし網代守　丈草

網代守

恵心寺に棹さしならふ網代守　支考

氷魚

友元
言水
許六
牧竜
駿石
木兒
文石
蘭更
宗鑑
松笠

栄漬

たつへ
千弓

栄漬や夕日の残る氷魚の数
栄漬や浪男たちの豆の色
数あるも佛さき仲巻これへ
あら磯や法ほうこれ氷魚の数
すれ日和よ月ゆ氷魚や村も北
海風や赤のれ影氷魚もる
夕ちかりう大魚新の唄かれ
引汐や子馬うこゆる母の浦
あ市長男代ゆ蒸ら氷魚夕子
肖戸口の八石ゆ氷魚の乳

越中 如雪
加賀 卯七
稲守
去来
支角
胃良
和及
江戸 蟠龍
山夕
文字

[illegible]

千那　江戸　和賊
心懐　尾張　雨亭
巴静
乙由
江戸　青仙
希因
貴吉

鳩　竜

[illegible]

乙兒
李支
正峯
[illegible]
[illegible]
芭蕉
[illegible]
文子
朱拙
北枝

このちまら
琴鶯

水鳥

[illegible]
あもの越もの八仁の水乃くもまら
後のくれ人てう乃をとの花の船
打ちの花の屋敷屋敷よりて船の
琴鶯乃花乃あ乃重砂よりまら
抑ものの水のうきとこ乃て
打ち鳥や波瀬ゆく鳥の上
琴鶯の法ゆく春乃如ゆく
乃花乃春あくまら静かり
水乃ものかりあるゆ沖の風

播磨 飛上
馬吳
鄭水
松花
武蔵 馬光
伊越 伊越
素丸
きの 吉春
李由
鼓界

木兎

[illegible]
水ふらの浪と異つて脱れ
水乃や月越もら春ゆら
枯もて者くあ乃れ乃
乃乃や流くく馬吳比叡乃
木兎や船りひ[illegible]の
月越ふくく木兎や尾の笛
木兎の声や木の葉乃落る
乃つく春峠ふ花乃枝庵
木兎や夜乃葉よ木ら屋敷

兎賈
乙州
宋茂
田川 蕉雨
上野 春路
尾張 芥境
鄭明
月等
紅残
素汀

竹鷄

火燵焚
嚔

宵ゞり嚔をくひせりゐるさの力　許六
晩力我おゝや嫁るみゑるとの力　怪然
つるし菜に嵐ていぬし竹鷄　嵐山
剃口哉上手ふ見やるゝさの　風國
の深居屁のうきし鶉鶉　從吾
糞乃月毛竃入て哉や竹鷄　吡藂
鉢起居火打は記やみそさゝの　鹿尤
毛以てみ猿乃哉おくや鷦鷯　苦雛
吟ふ年ゑ上手て終ゝ火焚哉　除荒
たゝとなく嚔すゝ子に何くれん　似春

夜興引
生海鼠

さゞ啼や琴弾ぬ家の奥　居士の桂川
月光るゝ夜興の犬のきしり入かな　冰花
秋興引や気ありて赴けるゝの哉　春波
夜興引も衣引あてらぬ峠の月　風付
尾張の田子の乳文生海鼠かな　素来
生おのゝひゝ川て我おまこ乳　芭蕉
らゝくと海月に海るなみこかな　東潮
打波や雨の紋まこの名さらおまこかな　、
粉京に吹よゝれし海参の殻　如行
荒海の角ありしと生海鼠かな　丈次

鯉　河豚

生洲嵐山に夜船をやとひ舟遊び
汲引り市へ出て魚を買ひ舟へ入れ
入れ舟の船頭に鯉を料理させ
鯉舟や岩に腰かけ雲を吹
ゆくえやあの網もまたのまぶり別
河豚汁はつきなれぬ味なれ
あく汁やあく抜きもなく
鯉賣の話合ひ命の那

春川　利生　春波　山李　李由　鯉風　芭蕉　生角　永吟

納豆汁　芋焼

鯉汁や吟味たりけり名たる男
遠人入り来りひとりまん鯉の洲
あく抜きや一寸入れしく藤七
ひらひら岩に来たるあぬかと汁
ぬる酒をくれ二人や河豚汁
河豚汁あり合ひ酒を語られ
あらら吉はきもの納豆の那
納豆や尼ヶ崎及び蓮の糸
鮒豆のらんぬりぬ味噌ぬ
芋焼や緑海君田舟の初氷

一洞　去来　兎士　僊嶠　麦士　布舟　竜平　浮風　芋村　蓑推　芭蕉

搗

搗の火や暖うて寒石臼の
湯くゝの火や暖よ暖よ暖たり
搗ぬ大よ甑炭竈もかゝりけり　文季
湯くゝの火て炉に炭ぶ　炭子長き炭ぶ　去來
炭竈と云て絶て荒法師ぶ　江戸　不炊
炭竈の煙や雪ぬよこゝろ立りけり　伊勢　蓬生
すゝ竈や簾の内に新炭焚　巳人
炭うりや日も急ぬと炭屋上　風伯
炭焼や遠炭屋水鼠とる　千角
立て炭焼も寒ぬ夜の家ぬ孔　渭橋

炭

炭や焼ぬ炭の雪炭投
花見ぬ炭ぶ　炭俵
語ぬ炭たて炭や炭ぶ
炭無い炭焼ぬ竈ぬ
うて炭ぬその木葉ぬ炭ぬ
山の中炭ぬ出ぬ炭ぬ　炭屋　伊勢　真菊
ぬ地竈ぬ炭ぬ　伊勢　南部
炭ぬや己ぬ樊ぬ　可全
何事ぬ炭入ぬ　尊江
加ぬ炭ぬ　小春
炭食　聖水

志知
任口
同和
浪花　昨非

紙子

初雪の上を走りて歩行れ
見せ別れ新なり雪踏紙子
猫の手て帝ちにの表衣の形
ちら蓬や古き加賀紙衾
のうれて在よ加賀紙子れ
宵錦よ食さるる寒子ぶ
南もりさるる表紙ぶ
古光付くく宮見よ寒ぶ寒子ぶ
兄前武袴ぶ
松風ぶ表紙ぶ

桃妖　加賀　名素　鬼貫　鯨爽　立冬　木導　芭蕉　春川　涼菟

蒲象
足袋
猫帽子
駝巾

冬紙の仔走仕直して紙子ぶ
見袋を花あるる新寒子ぶ
下に居るくも吉兆のくもの紙子れ
毛地ちんや怖ぶ夏尽後夜の袋
夜ぶや大焼蒙古の先地中
草足袋の新しき和泉紙ぶ
数ぶ夏くく寒やつぶりて猫帽子
初雪紙信まくくく駝巾ぶ
用の表真の牛く駝巾れ
蹴ぶれ鼻くれ新ぶれ

その素丸　玄武　涼菟　支朔　一渙　素園　毛紙　古芳　木導

湯婆
埋火

色々の頭巾の中や丸頭巾　柳和
鈴鹿山鬼か居見ありけり頭巾かな　素丸
ちらつくや可愛夜寒の頭巾かな　也有
御奉行の名まで呼て頭巾哉　一幹
湯婆の跡の蚯蚓をつまれけり　涼菟
踏れても知らぬかほなり湯婆かな　佳木
うづみ火や壁は客の影法師　芭蕉
埋火や夢団と違ふ辛の白ハ　許六
うづみ火や耳にいれる嵐かな　百里
埋火あり去なふとしては句ひけれ　神叔

火鉢
火桶

埋火や営み篭哉まゝまゝ　宗瑞
うづみ火やわかれし葉の葉　巴人
うづみ火や志か狙ひ櫓ひらり　風後
今ひらり咲出で火鉢かな　紀伴 順水
老らくや志らぬ火鉢を夜すの伽　秋色
脉見る人の指引のばす火鉢かな　吏明
夜咄にまださま火鉢かな　佐宗知
火桶抱く顔隠をかくし色　踏道
船頭の上には抱く火桶かな　陽和
口当ても無く火桶かな　老後 嘩丁

火燵

ほこ〳〵と朝日さしこむ火燵かな　文鱗

住つかぬ旅のこゝろや置火燵　芭蕉

ひとり寝ハ家焚させて火燵かな　江戸 嵐雪

おかしさハ高き巨燵かな　猿雖

手枕の夜長へうつす巨燵かな　魚日

魚より凄く文字火燵かな　諷竹

足ひえて火燵の巨燵かな　野紫

腰ぬけたるを起す火燵かな　鹿栢

猫の寝る背中にひく火燵かな　喜波

物思ふ人ありて入りこむ火燵かな　去静

冬籠

櫃添ヘ足さしのべる巨燵かな　佐良 虫鹿

姑ぞおもてに出ぬくさかりかな　李拾

佛にもなる身に哭て火燵かな　随吏

金屏の松の古さや冬籠　芭蕉

冬籠りまたよりそはん此はしら　〻

折〳〵に伊吹を見てや冬籠　〻

人哉吐く息を細めて冬籠　千那

唇に墨つく児のすゞみかな冬籠　涼菟

汁鍋の治まりけりや冬籠　〻

住よしや壁の兎やあはれ冬籠　之角

稀たく炭まもり　侍るや冬籠
冬ごもり　餅屋の物よ八重垣
徒然も　武もさびしき冬ごもり
冬ごもり　炉敷の間の埃の形
如何ぞと　夜座弁のあしぶ
焼もうこうこうもし　冬ごもり
冬籠　様ものく幸の海苔
下草の　年よりけつ　ものの籠
庵寒に　つり蜜柑の冬籠
爰よさへ　宮ばの山色や　冬籠

去芳　蘭
斎川　信
云秀　其角
木孝　地坡
枚風　訊弁
地坡　和及
彫蒙　肥水
木節　紺色
呂物　東河
温故　弓瓢

冬搔

砧の音　搔掛の枝や冬ごもり　蝶夏
雨風や　庵よりもれし冬かまど　信徳
藤の蕾　その根掘り掘り冬かまへ　其角
一村も　義りもの　如冬搔　地坡
山里も　冬ごもりて　尽て冬ごもり　訊弁
味ふまよ　浜掘や　ちゆう　和及
冬かまへ　つい　菜のうれの　大まつ　肥水
嵯峨みも　雪さびし　北の窓　紺色
門ふり　杖もくたく　雪の垣　東河
雪の釈　や　懸へ　書　釈弁　弓瓢

小雪之
雪垣

雪竹　つくろひの古机にこぼれ雪竹　涼菴
棹立てく越の海雪やうかべ　正秀

十一月

冬至　星の昼萩の夜長敷布哉　乙州
雪雲のうかぶ冬至気　朱拔
暦賣　ちらし売老りも寄り暦うり　伊豆　野水　鬼貫
暦うり乞食は彼岸問ふうり　丈角
新月や晩ひさむ下邸の格　訊外
魚尺せもの中迄くる炭屋し

髮賣
御火燒
吹革祭
子祭
子燒心
御神樂

髮賣やくるくる抜ふ釈迦
髮抜やの桃の世話の又ふり
市火燒の魚物ふる乳村の沢
沢山ふり吹革祭のとう家
祭ふりや我ふ新ふる氣も
新月や燒ふ髮の吹ふり
夜神楽面や巽魚家面形宛
御神樂面夫を樊清士あや仏
萩神楽押ぬくひる新角の雲
ふりふ太松子尺丈宮神楽

星祭

冬至　冬至　拔因　新月　李由　雲潔　鬼貫　丈角　太祇　徐爽　雪民

空也忌
法敲

大師講
御備事

後と謂孫殺きんく豆腐乎
空也忌　真菰
その古事や無学凡夫と称たる　麦斗
今めしく多者乃ちう　法敲　光堂
千万の形くかぎりなく　乞角
殺豆腐きもーほく　椎茸　色紙
孫三郎　法敲　銭道　光堂
七ちふく破ちもく　句堂
縄手の物参へと大師講　壽字
古佛つやもう他力の胡豆汁

雪

古仏事や牛蒡人も訴よ　出羽一方　芭蕉
いさ伝ふ空尺は物所まく　、
市人ひ　るいく見うん雪の笠　麦斗
る我さへ　詠ふ雪氏勢の乳　光堂
寒くこ　いへたくや雪の門　尾英
ふおの何ふ寒やう雪殺　湖春
人我と　ふくもしく凡人雪の笠　千角
糸雪と　参へち稚ー笠殺上　光堂
い出雪　雪ふ白ー盟殺ちうち乳　李由
乞食の　のいく寒う夜ち雪

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

文彩
文章
凡北
一品
汝村
教風
北枝
芳翁
浪化
介我

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

治依
金毛
四睡
吾仲
孤義
こ先
藤吉
沈良
此翁
古芳

雲孫
雲物

[illegible]
蓬の雲つのゝ雲のうきちり後へ
傳へ雲あれてこゝもけ雲ゝ舟
雲物やあれやあらぬ雲ぞ
傘かゝる雲のうらうらゝ雲
雲大ゝ[illegible]雲の見け
雲ゝ雲[illegible]雲ぞ
雲やけの[illegible]雲見け
雨ふくけ[illegible]雲も雲け
何雲の雲ゝ雲の見け

芭蕉
乞食
杜蕉
[illegible]古
江戸 孫子
芭蕉
涼菟
羽紅
[illegible]
安義 芭蕉

雲佛
雲光
吹雲

見て雲大きゝなり雲あゝ
佛り雲ゝこゝ雲ゝ雲佛
雲ゝ雲[illegible]雲ゝ雲
雲ゝ雲[illegible]雲ゝ雲
[illegible]の雲雲吹雲
の雲雲吹雲雲
月夜雲雲雲雲
雲雲雲雲雲雲
雲雲雲雲雲雲
雲雲雲雲雲雲
雲雲雲雲雲雲
雲雲雲雲雲雲

布舟
一井
[illegible]舟
沂風
乙州
李由
秋之坊
史邦
惹洲
越中 任之

みぞれ

霰

一吹雨やりすごしてのちけ
松杉すこしひくくなりぬ
佛さの庭ぬけて後そこなれ
川越の禪を志ふかしし
ゐの尾越しにつくもそ秋
いろ光りまさるあるもの枝木笠
ばくこうくく月取高を霰れ
霰長尾のとつくふあれの
柿の葉ふつ山あるあ霰
海へぬる霰やもふ浪かな吉

玄長 氷
素来
文字
毛說
蘇爰
芭蕉
杜國
耕雲
卯七
支角

冬 北二

氷柱

霰虫さ川越けん金ゐれ
ふ丁寒柱すくあるもれ
夜ゐ仁津てかくまる霰の郷
ゐくもさ和南しくかるゐの就れ
石蕗の紫もくあ色ふよ玉あ主
尾ふ八ふ赤の山あれや宮の中
くもあくゐ何そ刀く氷柱ふ
井のりくの芋ま辛ふつくル
鈴赤りくくれぬる氷柱ル
海くふふまてて尾くゐはくれ

光雲
文考
霜川
木因
芙蓉
世坂
尾張 夜水
尾長
麻父
下野 胡雨

凍氷

我さへ月新さゆるつらゝ氷　和羽
凍つけて凍つなう舞の凡　麥阿
田作水の有くけ氷新敷れ　凡兆
ちりくゝ氷のうゝ長小舟の敷　清川
紙障子夜の氷也孫さえれ　芭蕉
あしの木の力新やうゝ氷ぶ　不角
ちりつ見く我と摔ぶ氷れ　正秀
魚の新鮮のやうもおゝ氷れ敷　探丸
拾芦我と加ひて氷ぶ　小枝
あけく尺ひいちゝ氷れ　林鴻

ゝ氷形同のまゝ氷中ぶ　沈水　鶯舩
あ海へ舟うゝ投ぶ氷の郷　麦阿　波
ふくさけ紙ちり投新敷れ　夜ぶ　蟹釜
荒行者沈塔ゝ式ぶの敷　麦由
舟うゝの重ゝ我ゝ氷ぶ　蒐ぶ　秋水
ちゝ小面ゝ南ゝ冬重麦　乙物
屋ゝ立ゝ冬重梅　冬重梅　発士
月ゝ敷や椿の花ちぶ云ゝ　椿の花　四國
世敷色ゝのうゝ敷太山樒れ　太山樒　抱ぶ　坡雲
ひゝりゝ面詩ゝ蕎麦切の匂れ　葱　汎赤

人参引　　春帆
生姜掘　　蝶麦
雪流苦　　真角

鷹　　武州　鳴鶴

鷹狩　　文字
　　武州　所之
　　月華楽
　　子英
　　文華
　　里園

鷹狩用ひ来る山雲のうつり
狩衣袁神譏されもの鷹
たゝかりや侍衆袁公義と笠
麦立袁洞を志ろ鷹狩
鷹かりや初もとも見もとも初
ほまへ初の仕やゝやぬ先
太伝ゆゆ嘆くかもとゆかり
嘆も麦尺ゝ熱や嘆と楽
杜しとも志ろくや鷹の力こき

力車　　素丸
麦芋　　文秀
　　知七
　　俳客雲
　　麦水
嘆号　　後吾
　　武陵　乃秀
　　紀伊　文曉
　　尾州　南水

餘寒
初鰤
乾鮭
いさゝ

餘寒つく男と咲て海ちらう　万平
七代か人を悪まく餘寒かな　照乃
初鰤や禅寺の文か海さ記　安藝 越宗
初鰤や根のたに走る文大江山　季友
からさけや死ぬる時も口のあき　雲芝
干鮭や割木と共に打たれけり　近之
からさけや二本ゆたてた青　尾張 万平
からさけや山家の戸ゞ岩石　等邇
干鮭や既に桂木に花も味　凡枝
八朶代れて一口のいさゝ哉　日良

牡蠣
杜丈念
薬喰

とも喰に寄る鮫や蠣煮ぬ　鴬雲
鯛起やや我か尺くゆあ讀　真角
猪引たう起はかしおし肥くぬ　凡雪
かきむりやいく代蕪く噂あはれ　拙很
杜丈重なる寝はけあき寒も　立吟
ますまく数ある いつに薬喰　文寿
あの通り見ぬきさ長く薬喰　釋袍
鯱ひらり持て帰りもやくきる喰　美雅
薬喰ひさしてもらしきもられ　涼莞
猿鼓とりや狸もしくもり喰　尾張 芳舟

玉子酒
生姜酒
葛湯
あつめ
霜やけ
水洟

茶くひ気くらのみし女の乳　丹後 朱園
老やせ海も夜やあたゝし薬喰　也有
鉢叩きて入り嫁さん玉子酒　琵海
寒しさと見る青空し鶏卵酒　松笠
寒し夜や中衣姿の袱や生姜酒　森俊
御堂く夜寒安何んともと偲ぶ　江戸 幻吁
あつの身や河豚る晩刻の旅支　氷花
何事も雪や雪踏よこれ對面に　吾柴
投げ出だしもゆる霜やけも菜乳　山川
洟や押へてゐる小路の上ゝ　似雲

雪沓
樏
雪車

雪沓や日和よき日は横おろし　青寿
かんじきの度りぬる事叔父日の乳　東陌
ぬかるりと雪車ふれをする歩き　荷兮
雪車引ひてや休むも直ぐに立て居る　亀洞

十二月

乙子朔日
正月事始
臘八

良奉いたちもやとて乙子の祝ひ　走帆
事始まるさいや梅の一葉一つ　尚白
さくらも藪より来たら事始　可磨
臘八や寝ぬ御仏かな　支考

仏名会

臘八や板をさくるに味噌汁　許六
臘八や今朝新炊赤豆粥　焼芭蕉
臘八や小豆の粥を八つ時　扶風
臘八や八徹の鐘も山彦も　乙由
臘八やせんく火焼の山と見え　茶竹
臘八や鄙の中ふる里の新　六枳
臘八や海と空眠る雲の底　大雅
臘八や青のゆら毛逆ひ和　阮公
臘八や青のゆら毛逆ひ和　鈴水
仏名や菓子数何ぞもやう数　酒堂

寒の入

寒の内

寒垢離

寒の入の日より寒しと世俗仏名
仏名や花はなよりもよく板の屋る　去来
月忌の為なり針立て寒の入　芭蕉
寒もよへふよ寒しく夜長の祝　皇袋
寒蝕も寒也の寒も寒の内　芭蕉
夜明の解冷ぬてもさよ寒の内　千川
寒もあり社参へくりや彼あり　英能　取具
寒垢離の孔ちろ〳〵衣きく　路通
寒もこの部ふるとなんゝ鳴り沈　莫莊
寒垢離の日寒の次の枝寒し　兎士

寒念佛

寒聲

寒念佛や夜の淋しき人の
燈籠の欠消えいうに寒念佛
あれあれ孔雀木に寒念佛
ひの〳〵と狐なく時寒念佛
あるあり夜食のあるやかん念佛
〳〵衣さらく尼の寒念佛
寒ぬいふ極楽あり寒念佛
寒し忘仏察てなく我も斗り
あれ寒へもかん浜の紙の寒
寒あとを引つる松虫鳴の

京 安里
真角
広東 子舟
芦鶴
文意
存義
素丸
信中 風鶴
春雷

冬批八

寒遊

寒晒

寒や南大門君の影月
旅人の寒遊や勢多橋
寒雲やくれや凡夫の人君
寒聲や戻りにさふ帯の雲
寒声無蒜祀子手仕舞り
寒穀や松子まのりさく宮媒
寒あやさいく為勢の文太郎
君代が尼青ひつるや寒遊
時も知れの鶴や寒つくり

文角
桃妖
幸徒
越前 潮河
許六
加賀 晩梨
鬼七
江州 史邦
波郎

寒の水　汲のへ〻いと〻ふさやかなる水　浮海
寒の内　物古清〻しう也花さく〻寒の内　春治
鶏交　黄八の居さ動〻〻寒丸の　山城　舟芳
鶏巣籠　回の後よ鶏ぬ也日南乳　敦雲
囲凡　加〻ぬ也や松うゑひろ〻巣のさら　伊豫　東来
札納　まぬ也也〻〻雪の松と囲凡ぬ　凡兆
衣配　凡雪也し味つくろひなこへの川　雪
陸つへく落ぬ浦〻や札納　巴静
衣配り也四へ冬ぬ也ぬ　ゝし
文集の刺掃掃凡る衣配り　芳宸

冬部九

年貢　姉妹、そゝ〻ひと毛や衣くさら　木節
節分　餅の日ぬ也〻〻〻〻〻野や衣配　李導
年越　裁屑ぬ来の子ろ刺衣ろ〻　山鋒　尾張
寒夜　初鐵屑〻〻る鶏ふ屋の貢ろ乳　忘圖
節分ぬ乳我屋ろ刺ま子ぬ　積雄
若分や乳ま数の屋と刺　熊谷
夏越や屋ろ〻凡屋の焼ふ屋と　軽舟　尾張
少〻ま毛屋ぬろ屋ふ乳　遊魚　上総
須戸の石凡ぬ屋ふや寒ぬ乳　晃雪
寒夜一度ぬ屋ぬ〻ぬ乳ろ　秋晃

疋掛　　西鶴

豆打　　素堂

柊売　　芭蕉

鶯笠　　支角

年内立春　　也有

柳花

李吟

連歌師の去年とかいつたん発の表
紙を見たくなつかしやと年内立春
の発句を云ふ系つゝやかしつゝの内
多木ちう色も極まく踏りう年木越
日如月の月も踏りう年木越
ちく掛乞枝の木ちうの見うれ
煤掛や西炉素こくろ発句
煤さ枝の作ちゝ色の上
す掛不動り似ろ眠う那

許六

了ん

冬士

千代

金龍

玉尾

芭蕉

李由

見蕉

木導

何者とはしらず拾ひ
ぬく拾ひや二階を下る吉良義
央の袋を出く拾ひ出きり煙拂
蝶拂ひ何やらたる吉良の内
蝶拂ひ明あうく拂ひ祭
ぬき拂ひや何ぞ一つも拾ひ吉良
拂ひく拂ひ畳も吹き石の煙うく
大晦日南かまりやぬく拂
蝶拂ひや鏡ひ似るほの月
ぬき拂ひや巻まはり一たうし菱

峯公　巴聖　雪竜　月下　樹松　久秀　尚公　乙由　可風　乱亭

餅搗

五明ゑ三十日よりちうし餅の高
餅つきやぬくのんきる拝ぬ
りちぼきやぬくやぬくとふくり男郎
正月のちりやく餅の有羽山

餅花

餅つきや父斧の高き数斧の声
餅ぬやぬ嵐の用ぬちうしの山
りちぬ花の後ぬ焼けて散ぬ

素延

子産の一の宴や高砂一石

節季

節季ぬと花の気ぬ出ぬ
用ぬ数ぬ弗数ぬや弗数ぬ

巴蕉　許六　徐水　吾仲　可風　支角　耽水　玄来　巴蕉　一洞

節季はや白ふし来こそ名ゆ
ゑ知はてりて又年ゆくとも
氣て光ゆ夜時も有へし　節季は
節季俳の梅ゆ　長の極れ
長季は六ゆ　紫蘇の子孫ゆ
節季はや梅の近こも這へは
甘知はてり白ふ菜とゆ
長季は三ゆ氣の老ゆ人氣
蛇等ゆく節季はゆ
生ゆ知ゆ知の蛇等ゆ

蛇等

伊賀　順孫
東山
祝後
発士
伊豆　蓮之
武蔵　田平
吉田
京　仙行

蕪市

此ゆの市孫番ゆ出ゆ
市ゆ日の人ゆ出ゆ市の梅
神ゆ市ゆ市ゆ年市
神ゆ市ゆ市ゆ年市
嵯峨ゆ市ゆ市ゆ市
佛山の梅一部ゆ市
箱付梅ゆ市ゆ
見ゆ市ゆ羽ゆ板賣の梅ゆ

羽子板賣

穂市賣

種長賣

山里ゆ出ゆ人ゆ市ゆ種長賣

色葉
清言
玄東
牧童
立志
魯江
信徳
蒐陸　宗雪

歯朶賣
松賣
門松立る
古暦
年忘

年の尾を踏ちぎらるゝか歯朶賣　露川
松賣や大京あくる門つ紀　素也
我庵も松賣に立て覗けり　周竹
古暦何かし文人なりぬ書せん　嵐雪
あれ咲くや末前の經れ我暦　阿言
焼ともに在へ老り暦かれ　桃彦
此し忘れ義垣蔵して帰りけり　舟夷
廿引して年忘せも我縁れ　芭蕉
年日もれ至子桃あや花ある　洒堂
終し忘れ筆ヲり鞘して納めけり　素丸

寒梅
早咲梅
臘梅

此し忘れ梅こそさへてさも晩　松舟
寒梅や常先来くはくはく　（浪花）周之
寒梅や手悪し盛てき春死を　止絃
也つらうし奈吉生初冬の梅　惟然
護念の信つとりん冬寒し光　露沾
暮れ先の軍にも梅の咲けり　此通
冬妻の葉そ川ゆるや冬の色　去芳
常あり乳房見るや冬の梅　宗羽
一輪あ付くやりり梅の香あ　（柏原）嵐南
臘梅を咲く藤つく惑慰ふ　（素堂）沾来

子嘆接

水仙の花に幾日よりあり長冬つゝく
名残をまくまよ咲うり冬ゆゑ
う淋きう別れをよつ手もや冬椿　一笑
小鳥の足筆に野川沙毛ル　近江　鶴来
何うり付沙毛の市よりう氏　芳本
世の中魚、獨うとの師走ル　乱笑
雪隠うり四戒を海氏沙毛ル　芭蕉
侍妻やし机うそろふ書の小口　如行
侍春や氷うり海ゑもう芥　先士
春の風や毒のゑ北見やう　浪化
　　智月
　　二の風

冬四十四

師走

春と侍

歳暮文

春ちゝ三度味噌の花ゆゑ　李由
春ちゝく樹稜のひゝ菜炊ル　亀洞
花のゝ氏蕾ちゝ氏ゑ氏のもく　常矩
子戒ゆく、ゝ月なゝ年の暮　其角
やく愛人の数ゝ氏ゑ氏のゝ　芭蕉
給ゑい氏ゑ数甲斐ゑ氏ゑの暮　〃
すちまや女の目候ゆゝの暮　信徳
力ねゝと入り、ゝ氏ゝ案ゝ氏　路通
我出ゝくよ光ゆ拘ゑゝの暮　尚白
祖父ゑ山婆ハ使ゑ年氏暮　木因

行年

月下
孤雁
智月
秋風
露川
文弟
蓮之
湖春
[illegible]
仆山

冬四十又

大批日

雲鼓
去来
汎水
風国
許六
寒陀
希因
西鶴
太祇
楚舟

更衣

大きゝ御釈子俵ゆたかさ〻ゑひ
大ぶ〻や多のをとゝる人ん
此市ゝ翌元日を祝ひ
ハゝうて四やたゝや〻ぶ〻竜
ゝ〻竜木の多ゝ御新敷名所は

一方平
羽衣
更衣
赤竜
利金